

## ローマの信徒への手紙5章1-11節 「苦難から希望へ」

今日の箇所パウロは、イエス・キリストを信じる信仰によって神に義とされ、救われたことによって与えられた喜び、確信、希望を語っています。要するに、キリストを信じて生きることがこんなに素晴らしいことなのだ、ということを語っているのです。今日の箇所を読んでいると、とても気になる言葉があります。それは「練達」という言葉ではないでしょうか。新共同訳や口語訳では「練達」となっていますが、聖書協会共同訳聖書では「品格」、新改訳では「品性」、英語欽定訳は「experience(体験によるもの)」と、異なります。「苦難から希望へ」と題名を付けましたが、本当に苦難が希望に代わるのか、とも思ってしまいます。詩編 55 篇 23 節「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる。主は従うものを支え、とこしえに動揺しないように計らってください。」とあります。つらい。苦しい。死んでしまいたい。ところがそんな中に、神の声が聞こえる。「あなたの重荷を主に委ねよ」と。この神の助けを知っているから、この神の声を聴いているから、だからパウロはこう言うのです。苦難が忍耐を生み、忍耐が練達を、練達が希望を生むことを、わたしたちは知っています！この希望が失望に終わることはありません。私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。神の愛がわたしにも注がれているから、だからこそ、その神の愛の中で造られていく品格です。

ここで品格・練達と訳される言葉は、もともとは、「試験をして、吟味して、本物であることを証明する」という意味の言葉に由来します。「合格・本物だ、ということ証明する」。苦難の中で忍耐しなければならないところ、その人の人間そのものが試されます。まさしく私たちは試練の中で、試され、練られるのです。自分という人間そのものが試されてしまうのです。いったい、自分というのがどういう人間なのか。自分は、人間として合格なのか、それとも不合格なのか。そして、自分自身の品格を・練達を造り上げていこうとするのかもしれませんが、けれども、聖書が教える品格・練達は、そのようなものではありません。神の愛の中で造られていく品格です。そのことについて、竹森満佐一という説教者が説き明かしている言葉があります。「もっともすばやく神に依り頼む魂のことでありました。」

自分で自分の心を訓練するのではないのです。神の愛に裏付けられて、「もっともすばやく神に依り頼む魂」を、既にいただいているのです。私たちは神に愛されているのだから、苦難は必ず忍耐を生む。わたしたちは神に愛されているのだから、その忍耐は必ず品格・練達を生む。わたしたちは神に愛されているのだから、その品格・練達は、必ず希望を生む。その希望が失望に終わることは、絶対がない。なぜかと言えば、わたしたちは神に愛されているから。自分の信仰をぶつけるように、言い換えれば、自分自身をさらけ出すようにして言うのです。「これが、神に愛された人間の品格・練達です！」と。

臆することなく、私たちの信仰をぶつけていきたいと思えます。私たちの品格は、その神の愛が本物であることの証明にほかなりません。今、新たな思いで、品格の共同体・教会を御前におさげしたいと、心から願います。お祈りをいたします。